プロローグ

「メッセージをバッファリングしました」通信装置がパチパチいいながら作動し始めた。「ドップラー補正を実施しました」

宇宙船アルテミス号の中は、これまでのところ不気味なほど静かだった。そこへ、突然人間の声がひびいたのだ。しかも、怒っている声だった。

「ジョージ、お母さんよ！」

スピーカーから、きんきんした声が聞こえてくる。ひどく憤慨しているらしい。

「うわあ！」巨大なロボットのボルツマン・ブライアンが声を上げた。

この宇宙船には、ジョージとボルツマンしか乗っていない。

「あなたのお母さんに、ごあいさつしましょうか？　きっと心配しているでしょう」と、ボルツマン。

「しーっ」

ジョージは体を浮かせると、宇宙船の前方へと移動した。ジョージは、アルテミス号で地球から

出発したとき、ボルツマンと自分がこんなに遠くまで運ばれるとは思っていなかった。ところが実際は、まるで宇宙空間を走る荒くれ馬の背中に飛び乗ったみたいなものだった。

ジョージは、いらだっているお母さんには聞こえないところまで遠ざかると、ボルツマンに言った。

「こうなったのは、ボルツのアイデアだったって言われたくないよね？」

ジョージは、ぼろぼろのロボットを懇願するような目で見た。ずいぶん前に、ボルツマンは宇宙の高いところから地球に飛び降りたことがあり、地球の大気圏に突入するときに生じる高熱のせいで、頭と体が焼け焦げてしまっている。それを見るとジョージは、人間の体はそのまま宇宙船の外に出たら生き延びることなどできないと、いつも思うのだった。

「だけど、わたしの考えではありませんよ。お母さんに作り話をしても、現状はよくなりません」

ロボットのボルツマンは、人間の感情をマスターするのがだいぶうまくなっていたが、まだ人間のいちばんの基本的な習慣――ウソをつくこと――は、十分にマスターできていない。

どっちにしろ、地球にいるお母さんに作り話をしてもしょうがない。どっちにしろ、ジョージとボルツマンは超高速の宇宙船に閉じこめられて、地球からどんどん遠ざかっているのだ。……それに、どうやったら戻れるのかも、わかっていない。ジョージはマイクを手に取った。

「お母さん！」

「ジョージ！」

小さく聞こえてくる声には、怒りと喜びがまじっているように思える。泣き笑いをしているのかもしれない。

「ジョージ！」

「やあ、お母さん」ジョージは言った。

「ジョージ？　今どこなの？　宇宙にいるっていうだけじゃ、答えにならないわよ。そんなことは、こっちだってわかってるんですからね、ジョージ・グリンビー。ジョージ？　ジョージ！」

「もしもし、お母さん、お母さん！」

そのとき突然、自分の声がお母さんには聞こえないのだとジョージは気づいた。宇宙をメッセージが伝わる際の「時間の遅れ」のせいで、地球上で話しかけているお母さんは、ジョージの返事をすぐに聞き取ることはできないのだ。ジョージの声は、広大な宇宙をまだ旅しているとちゅうだからだ。実際には、お母さんは今聞こえた音声を何時間も前に、あるいは何日も前に送ったのかもしれないし、今はもうマイクの前にはいないのかもしれない。ジョージはがっかりした。せっかくお母さんとやりとりができたと思ったのに、実際はそうではなかったのだ。

［訳注：「時間の遅れ」には2種類ある。第1は、遠くからは、光も音も遅れて到着するというもの。第2は、ロケットが光速に近い速さで地球から離れていくとき、地球からの音声は、いわゆるドップラー効果で、高音も低音になり、スロー再生したような音声になる。しかし、このアルテミス号は、通信装置で「ドップラー補正」をしているらしい（冒頭部参照）。つまり一旦録音して、それを早送り再生して元の速さに戻している。］

お母さんの声がまた聞こえた。
「ジョージ・グリンビー！　いったいどういうつもりなの？　へんてこな宇宙船に乗りこんで、みんなを死ぬほど心配させるなんて！」
通信がとぎれて雑音が入り、ブーンとかプツプツという音しか聞こえなくなった。
「ぼく、わかってなかったんだよ！　こんなはずじゃなかったんだ！」ジョージは、お母さんには聞こえないと知りつつ、泣き言を言った。
とっさに思い立って宇宙船アルテミス号をハイジャックしたときは、大冒険が始まると思ってワクワクしていた。気がすんだら戻ればいいと思っていた。発射直後に、ジョージとボルツマンは宇宙船をコントロールして、地球を周回する軌道に乗せるつもりだった。そして何度か回ったら、宇宙船の速度を落として軌道をはずれ、地球に戻ればいい。もし両親があまりにも憤慨してジョージがこの先二度と地球から出ることができなくなったとしても、本物の宇宙船に乗って飛行する体験はやってみるだけの価値があると、ジョージは思ったのだった。
でも、そううまくは行かなかった。アルテミス号は、最初から決まっているプログラムにしたがって進んでいるみたいなのだ。コースはあらかじめ定められているらしく、こちらの思いどおりにしようとしても、まったく反応しない。それどころか、大砲の弾のように地球の大気を切り裂いて突進していくのだった。灰色に見える月はあっという間に過ぎ、地球はどんどん遠ざかり、闇に浮かぶ何千という光の点の一つになってしまった。

今、アルテミス号は宇宙空間を猛スピードで駆け抜けている。窓をのぞくと、たくさんの星がどんどん後ろへ流れていくのが見えた。宇宙船のコントロールパネルは、ボルツマンがどんなに指示しても、言うことをきかなかった。宇宙船の特別室ではレタスが育っていたが、ジョージとボルツマンはそのレタス同様、手も足も出せないのだった。宇宙のレタスが少しずつ成長していくように、ジョージたちも、アルテミス号の遠征の目的が明らかになるまで、だまって待つしかないようだ。アルテミス号は、ジョージが最初予想したように、火星まで行くのだろうか？　それとも、前に伝えられたように、木星の衛星エウロパに向かっているのだろうか？　だとすると、ずいぶん長い旅になるが、今のところはただ、ぐんぐんスピードを上げながら闇を突っ切っている、ということしかわからなかった。
ボルツマンが、通信ポータルに向かって声をはり上げた。
「ジョージのお母さん、こんにちは。こっちは楽しくやっていますよ。心配いりません。この宇宙船には、最高品質の慣性調整装置がついていますから、速度が極端に上がったり下がったりしても、乗組員がつぶされる危険はありません。もしそれがご心配なら……」
そう聞いて、お母さんが安心するとはとても思えない。ジョージは、ボルツマンのメッセージが宇宙のどこかに消えてしまえばいいと思った。
突然また、お母さんの声がはっきり聞こえてきた。
「エリックが、その宇宙船の向きを変えようとしてるの。でも、あんたが戻るまでには長い時間が

かかりそうだって。エリックによれば、アルテミス号はエウロパや火星には向かってはいないらしいの。向かっているのは……」

「どこなの？　どこに向かってるの？」ジョージは叫んだ。

パチパチ　ブーン　シュー　ツツツツ。お母さんの声がとぎれて、雑音しか聞こえない。ガガッ……ガガッ……ブーン……シュシュシュ。

「お母さーん！」と、ジョージ。

この時ほど、ふつうのたいくつな通りに建っているふつうの家の自分の部屋にいたいと思ったことはない。ふたごの妹たちがうろちょろしていて、お母さんはキッチンにいて、お父さんは庭で自家製の発電機を動かすための薪を割っているはずだ。

そのイメージはあまりにもくっきりしていたので、ジョージは自分もそこにいるような気がした。庭から家の中に入って鼻をひくひくさせると、お母さんがいつものブロッコリ・マフィンを焼いているのがわかった。妹たちは桜の木で作った積み木を高く積んだり、それをくずしたりしている。外からは、お父さんが斧でバシッと薪を割る音が聞こえてくる。わが家だ。ジョージがいるはずの場所だ。

ガガー！　アンプが大きな音を立てた。ジョージのお母さんはどこかへ行ってしまい、ジョージはこの無機的な宇宙船の中に戻っていた。空気はムッとして、まわりには乾燥食品のパックが積んであり、友だちといえばロボットしかいない。宇宙食はまずくはないし、「ベーコンサンド」とか

「チョコレート・ミルクセーキ」といったように、さまざまな香りもついている。宇宙船には水のリサイクル装置も備わっているので、ジョージは食べ物にも飲み物にも困ることはないはずだ。ロボットのボルツマンだって、いい仲間だ。だけど、そうだとしても、自分の家族や、いつも冒険に出かけたくてうずうずしている親友アニーといっしょにいるのとは比べものにならなかった。となりに住むアニーとは、いつも連れ立って冒険をしてきたのに。今回は、ジョージだけで飛び出してきてしまった。

お母さんの声が聞こえなくなり、通信がとだえた。こうなると、エリック・ベリスがなんとかしてくれるのではないかという、最後の希望も消えてしまった。エリックは、親友アニーのパパで、超有名な科学者で、コスモドローム２（ジョージの家のあるフォックスブリッジの近くにある宇宙船基地で、アルテミス号もそこから発射された）の所長をしていた人だ。ジョージたちは、まだ宇宙を猛スピードで突っ切っている。でも、どこに向かっているのだろう？　ジョージはマイクをにぎったまま、役立たずの操縦装置にもたれかかった。通信装置からは、パチパチ、ブーンというような音や、奇妙なかん高い口笛のような音がまだ聞こえていたが、そんなものはただの雑音にすぎない。

「元気を出して。ほら、こんなものを見つけましたよ」ボルツマンがそう言いながら、ロボットの長い指でジョージをこづいた。

ジョージは、ぼうっとした目を上げた。

「ラズベリー・リップルですよ！　新しいフレーバーです。食べたいでしょう？　そろそろ晩ごはんの時間ですか？」
ボルツマンは、ジョージの顔の前で、ケーキミックスの箱をふりまわしながら、にこやかな声で言った。

宇宙船に乗っていていちばん奇妙なのは、しばらくすると時間の感覚がなくなってくることだ。ジョージの腕時計は故障しているみたいだし、ボルツマンの時間管理機能はなぜか不調で、コントロールパネルにも手がかりがなかった。それに、一日を区切る日の出や日の入りもない。
ジョージたちは、寝たいときに寝て、起きたいときに起きていた。ジョージは、眠くなると寝心地の悪くない寝棚にもぐりこみ、ボルツマンは、充電が必要になると動きを止めて、宇宙船の太陽エネルギー供給装置を利用した。いっしょにおしゃべりをするうちに、ボルツマンは、人型ロボットとロボットみたいな人間はどう違うかについて知識を深めた。しばらくするとジョージは、ボルツマンが自分の真似をしているのに気づいた。まるで鏡のロボットを見ているみたいだ。
そんなふうにして日々は過ぎていった。少なくともジョージは、何日かが過ぎたと思った。ふたたび地球からの声が聞こえてきたとき、本当は何日たったのかも、わからなくなっていた。
「ジョージ！　ジョージ！」こんどは親友アニーの声だった。
ジョージとアニーは、コスモスというコンピュータの扉を利用してエウロパという氷の衛星まで

行き、最も邪悪な男アリオト・メラクに勝ったあと地球に戻って、発射寸前のアルテミス号に閉じこめられていた子どもたちを危機一髪で救い出したのだった。メラクは、地球で最も賢い子どもたちを秘密の宇宙ミッションで実験に使い、太陽系の中で生命体を見つけようとしていたのだ。ジョージとアニーは、あわやというところで子どもたちを救うことができたのだったが、その時、メラクの量子テレポーテーションをとちゅうでストップさせたので、メラクは分解されたままで、人間に再構成されなくなったのだ。
ただ、アルテミス号はメラクが極秘で設計し建設した宇宙船だったので、メラク以外の者は操縦できないらしかった。メラクが消滅してしまうと、この宇宙船がどう動くのかを知っている者が地上にはひとりもいなくなった。今どこに向かっているのかもわからないし、最高の頭脳を持つエリック（アニーのパパ）でさえ、アルテミス号の進路を変えることはできないのだ。
「アニー！」
ジョージは大声をはり上げると、通信ポータルまですっ飛んでいった。ジョージは、今では微小重力空間で自由に動けるようになり、いろいろなとんぼ返りやでんぐり返しまでできるようになっている。
「ジョージ！　まだそこにいる？　聞こえてる？　できたら連絡して！　こっちは大変なの」アニーは、早口でしゃべっていた。
「ぼくだって、そうしたいよ！　でも、戻る方法がわからないんだ。だれにもわからないんだよ！

それに『まだここにいる』って、どういう意味？　助けてよ、アニー」ジョージは叫んだ。
「何もかもが変わっちゃったの」
アニーの声が突然はっきりと聞こえてきた。それは、なつかしいアニーの声に違いはないが、もっとおとなっぽくて、もっと落ち着いていた。でも、不安がにじんでいる。
「何もかもが、うまくいかなくなってるの。世界が逆さまにひっくり返ったのよ、ジョージ。こわれてしまったの。わたしたち、それを止めることができなかったの。ジョージ、聞こえてる？　助けてほしいの！　エリックを助けて！」
ジョージは凍りついた。はるかかなたから宇宙を超えて友だちの声が聞こえてきて、助けをもとめているけれど、こっちには助ける方法もなければ、リアルタイムで返事をすることもできないのだ。そう思うと、つらかった。となりにいるボルツマンも固まっていた。ジョージと同じでこのロボットも、恐ろしいニュースを聞けば心が痛むとでもいうみたいに。
「エリックはどうしたの？」ジョージはたずねた。
でも、すぐには声が届かないことはわかっている。宇宙に向かって叫んでも、それはびんに入れたメッセージを海に流すようなもので、だれかが見つけて答えてくれるかどうかは、わからないのだ。
「まさか！　まさかあのエリックが！」ボルツマンが、ロボットにしてはずいぶんと感情をこめて言った。

「しーっ！　アニーの言葉を聞かなくちゃ」と、ジョージ。
「エリックが行方不明なの」まるでジョージの声が聞こえたように、アニーが答えた。でも、声をひそめている。「ジョージ、エリックは行動を起こしたんだけど、つかまってしまったの。だれかに裏切られたのよ。エリックはやつらを止めようとしていたんだけど、今はどこにいるかわからないの。とても心配で……」アニーは、息切れしたような声で言った。
「やつらって？」ジョージはきいた。
きいてもすぐには届かないのがわかっているけど、きかずにはいられなかった。
向こうから聞こえてきたのは、悲鳴だった。その悲鳴が、大きな、ほとんど空っぽの宇宙船の中にひびき、壁にはねかえってこだました。
「アニー！　アニー！」ジョージは、通信装置に向かって叫んだ。
でも、声は消え、通信はとだえた。ジョージは、宇宙に浮かんでいるアニーの姿が見えるかもしれないとでもいうように、窓まで走った。でも、広大な宇宙空間が見えるだけだ。果てしない光のショウのように、広大な宇宙空間で、明るい星や、奇妙な天体や、巨大な岩がまわりながら通り過ぎていく。
ボルツマンとジョージは、だまって視線をかわした。ロボットと少年、メカの目と人間の目が見つめ合う。
「ボルツも感じてるよね？　地球では、何かがとてもおかしくなってるらしいんだ」ジョージが言

った。
　ロボットはうなずいた。
「故郷から遠く離れているあなたが、悲しんでいるのを感じます。地球の有機的な部分がおかしくなっているみたいですね。わたしも、ずいぶん遠くまで来てしまったと感じ始めています。あなたの宇宙飛行の夢はかなったのですから、もう戻ったほうがいいですね」
「この宇宙船はどこを目指しているのかな？　アリオト・メラクは言ってなかった？」
　ボルツマンは首を横にふった。
「わたしのご主人には、たくさんの秘密がありました」コントロールパネルまで行くと、アルテミス号の飛行を管理するシステムを何度もいじりながら、ボルツマンは言葉を続けた。「それに、たくさんの策略も。もしあのご主人が、目的地はエウロパだと言ったとすれば、アルテミス号がそこへ行かないのは確かです」
「ぼくたち、どれくらい宇宙にいるんだろう？　どうしてここには時計がないんだろう？」と、ジョージ。
　ボルツマンがスイッチを入れたり、コマンドを入力したりしているので、ジョージにはあまりすることがない。
「どうしてここには時間がないのかな？」ジョージはきいた。
「時間はいつもあります。そして、いつも前に進んでいます。でも、この宇宙船がどれくらいの距

離を、どれくらいの速度で進んでいるのかは、わかりません。この宇宙船の慣性ダンパーからすると、おそらく速度は……」
「地球に帰ろうよ、ボルツ。どれくらいかかろうと、かまわない。だって、あっちで助けをもとめているんだもの」ジョージがきっぱりと言った。
　ボルツマンはまたシステムに入りこんで、見えない力からコントロールを取り戻そうと試みたが、むだな努力に終わった。外を見ると、星がずんずん流れて明るい光の虹ができている。ジョージは、しばらくの間、地球からこんなに遠くにいる人間は自分ひとりかもしれないと思って、もの思いにしずんだ。だけど、この先、地球に戻って、自分が体験したことをだれかに話すことなんてできるのだろうか？　そして、地球に戻れたとして、いったい地球はどうなっているのだろうか？
　ボルツマンは、宇宙船の進路を変えようとしてさんざん奮闘し、額の汗をふくまねをした。ジョージはおかしくなった。ロボットは汗をかかないから、ふく必要もないのに。だけど、人間の動作をまねて、がんばっているところを見せているのだ。
　しかし、ボルツマンがあきらめかけたとき、宇宙船そのものが言葉を発した。
「**往路の最高点に到達**」
　ジョージもボルツマンも、びっくりして飛び上がった。
「それで、どうなるんだ？」
　ジョージは声をはり上げたが、きくまでもなかった。ここまで宇宙の闇の中を猛スピードで突っ

切ってきた巨大な宇宙船は、今や止まりかけたかと思うと、ついに向きを変えたのだ。
「ボルツ、もしかして……」
ジョージは、まだその先を言う気にはなれなかった。
「そうですよ」ボルツマンは、にやっと笑いながら言った。
「ほんとだ！　宇宙船が向きを変えたぞ！　きっと戻っていくんだ」
ジョージは、ボルツマンに飛びつくと、ぎゅっと抱きしめた。
そのとき、通信装置から冷ややかな声が流れてきて、ジョージもボルツマンもぎょっとして動きを止めた。
「家から外へ出ないように」声ははっきりしていた。
背後からは、多くのサイレンが鳴っているみたいな、けたたましい音も聞こえてくる。
「惑星・地球のみなさん」放送が続く。「あわてないで家にとどまりなさい。抵抗しないように。これは訓練ではありません。くり返します。これは訓練ではありません」
命令を下す声がひびいたと思うと、大きな爆発のような音がした。地球の表面を粉ごなにくだき、大気圏や成層圏にキノコ形のガスの雲をふき上がらせるような轟音だ。
それから、しーんと静かになった。